

瀋陽航空機会社が J-16 型多用途戦闘機のバッチ生産を開始

漢和防務評論 20170904(抄訳)

阿部信行

(訳者コメント)

瀋陽航空機会社は、中国国産 J-16 戦闘機のバッチ生産を開始するようです。同機は、輸入したロシアの SU-30MKK のコピーと言われてきましたが、国産エンジンの性能、部品の品質問題から、とても原版なみの性能が出せないようです。中国海軍は、航続距離の長い対艦ミサイル攻撃機を欲しがっています。中国海軍は結局政治的に国産機を受け入れざるを得ない、と KDR は見ています。

KDR 香港特電：多くの権威筋の話から瀋陽航空機会社が J-16 型多用途戦闘機のバッチ生産を開始することがわかった。2011 年 6 月、KDR は関連報道の中から J-16 の存在を確認し、当時次のように報道した：瀋陽航空機会社の飛行場に SU-27UBK に酷似した J-11BS 練習機を発見した、と。しかし権威筋は KDR に次のように述べた：それは J-11BS ではない。海軍の要求に基づいて改修した J-16 である。この機体は SU-30MK2 のコピー版であり、主として海軍航空兵部隊に向けられる。空軍も装備するかもしれない、と。これは国際メディアとして J-16 の存在をいち早く報じたニュースであった。

6 年経過し、J-16 は極めてわずかな数を生産しただけであった。しかも J-11B の生産が停止した状況下で。鼎新基地の試験飛行部隊が試験のために導入した。5 年かけて試験飛行が行われ、当初、直面した主要な問題は：WS-10A エンジンの品質及び J-15 が直面した問題と同様に部品の品質が悪く、航空機の可動率が低い等々であった。

2016 年 11 月の衛星写真によると、瀋陽航空機会社に 14 機の J-16 が出現した。これは観察によって確認された数である。すべて複座型であり、塗装が完了する前であったので、海軍用か空軍用かは不明であった。それ以前に権威筋は KDR に対し、海軍も空軍も欲しがっており、生産機数は多くなるであろう、と述べた。

2016 年、また新たに 10 個の格納庫が建設された。それ以前にも 8 個の格納庫が建設されていたので、J-16 の実際の生産機数は昨年さらに増大していた可能性がある。J-11B を年産 14 機のスピードで生産していたので、インドが SU-30MKI を生産するスピードに比べれば、相当速い。

中国空軍は Q-5 攻撃機を装備し、海軍は JH-7 戦闘爆撃機を装備している。こ

これらの航空機は次々に引退する。したがって中国の消息筋が述べた J-16 の生産機数は相当多くなる、との説は、正しいはずだ。2016 年、西安航空機会社では 4 機の JH-7A が発見されたただけであった。2015 年 12 月、13 機の JH-7 が出現したが、ある情報によると JH-7A は生産停止した可能性があるという。これは正しいか？最後に確認が必要である。しかし何といたっても JH-7A は 1970 年代の設計概念の機体である。したがって J-16 の生産は、すでにある程度の規模に達しているはずである。この種の多用途戦闘機は、対地、対海攻撃が主任務であり、制空権獲得は J-20、J-10B/C に任される。したがってたとえエンジンが不調でも J-16 は受け入れられることになるであろう。

J-16 は、新時代の中国製 AESA レーダーを装備している。開発期間から見て、逐次改良された可能性がある。その上、中国が自力開発した大量の空対地、空対艦ミサイルを加えれば、J-16 は一定の実力を備えたと見ることができる。しかし KDR は、J-16 が AESA レーダーを装備している説には懐疑的である。それは主にコスト問題を考えるからである。そうでなければ J-11D を改良する理由は何なのか？J-11D のレドームは AESA レーダー用である。J-16 の開発とバッチ生産の状況を見ると、J-11D がバッチ生産されるまでにはさらに多くの時間がかかると思われる。

J-16 は、多くの国産空対艦ミサイル、例えば YJ-12（艦対艦ミサイルの空対艦への改修型）を携行でき、このミサイルの射程は 300KM を超える。技術の問題ではない。この点からも海軍航空部隊の対艦攻撃能力は飛躍的に高まる。SU-30MK2 の搭載量は 8 トンである。相当大きな航続距離、1500KM の作戦半径、これらの利点は J-16 が発揮するはずである。

ロシアの NOVATOR 設計局は、CLUB シリーズ対艦ミサイルを基礎にして、SU-30、SU-35 に搭載する CLUB AE 型空対艦ミサイルを開発した。原版の CLUB をコピー生産した YJ-18 型多用途ミサイルも今後空中発射型が開発され、J-16 に搭載される可能性がある。この種のミサイルの射程は 300KM を超える。原版の 3M54AE1 は対艦型であり、AE は対地攻撃型である。ミッドコースで北斗-2 衛星システム (BD-2) の誘導を受けると、命中精度はより高くなる。

J-16 が J-11B と大きく異なる点は : J-16 は多用途戦闘機であることだ。厳格に言えば、中国はかつて双発で大型の多用途戦闘機を開発した経験はない。JH-7A の位置づけは戦闘爆撃機であり、爆撃を主とし、一定の空戦能力があるというだけだ。

この他、J-16 のバッチ生産は、中国航空工業の発展のバランスを図る意味合いがあるのかもしれない。J-11B の生産停止後、瀋陽航空機会社は軍用機生産が途絶える？2016 年になっても、J-15 の大量生産の兆しはない。J-15 に対する技術的要求は J-16 の比ではない。艦載戦闘機は高い可動率と信頼性が要求される。

もしそうならば、西安航空機会社はどうなのか？JH-7A の生産が停止されると、

何を生産するのか？2016年4月の衛星写真によると：少量のH-6Kが生産中である可能性がある。飛行場に4機駐機中であり、西安航空機会社の工場稼働は問題ないように見える。Y-20新型輸送機、新型戦略爆撃機の生産もあり、仕事がなくなることはない。この他Y-20を基礎にした各種電子戦機、早期警戒機の改修等が”飯の種”になろう。

KDRが最初から考えていたこと：J-15の生産は重大問題に発展するであろう。大げさに話しているのではない。J-16も同様の問題に直面するであろう。今後部隊が喜んで受け入れるかどうか？未知数である。そうでなければ、なぜSU-35を買ったのか？全てにおいて模倣する中国航空工業の姿勢は、習近平の時代になって終結する可能性はある。

空軍は、当然J-16を運用する理由はある。現在開発中のYJ-18は、3M14AE1に類似した対地攻撃ミサイルとして開発することができる。たとえ、航空機本体の品質レベル、可動率が低く、空中機動性も原版のSU-30MK2より劣っても、新時代の武器、AESAレーダーを搭載すれば、一定の働きはできる。類似の作戦機として、中国には昔から”ミサイル攻撃機”の概念があった。

以上